

特集 勉強つてなくに

「習うは一生」ということわざがあります。この意味は、簡単に言えば「新しい事を知り、身に付けていく為に、人は一生を通して、常に、学び続けなければならぬ」ということです。

また、吉田松陰は学びの大切さを弟子に諭す際に、「人は何の為に生きているのか。それは、学ぶためであり、学んだ事を行動に移すためだ。一方で駄目な人間とは、人柄が良いだけの者と学んでも行動しない者だ」と言っています。

「学ぶ」「習う」と聞くと、どうしても「勉強」を連想しがちですが、この二つの話からは、勉強だけではない他のものも連想されませんか？ 今回の特集は「勉強つてなくに」という問いを、子どもたちや大人に投げかけたものです。みなさんも、一度じっくり考えてみてはいかがでしょうかでしょう。



●出典：「育てる」通巻237号 昭和63（1988）年3月25日発行

勉強ってなんだっけ

小5女子

机の上にノートを広げて、さあ勉強を始めましょう。勉強？　ん？　あれっ、勉強っていったいなんだっけ。

美しい森の中で小鳥の鳴き声を聞き何かをあたえてもらうのは勉強ですか？　それとも、一生けん命ノートに何か書きこむのが勉強ですか？　わたしは、じしよで「勉強」という意味を調べてみました。「勉強は知識をえるために先生に教えをうけたり本をよんだりすること」と書いてありました。

わたしが次に思ったのは、スケート教室や移動教室はどうなるんだろう、あれも勉強だと思っただけど…。

移動教室は、「自然」が先生になって、ふだんとはちがった勉強を身につけるのだと思いました。また、スケート教室は自分自身が先生になるかもしれません。ときには、自分の心が先生になるかもしれません。それぞれの先生がわたしに新しい知識をあたえてくれる

のです。一人の人間が教えるだけが勉強ではない。そう思ったのです。教えられることによって、一人一人がちがった道を歩いてゆくと思いました。立派な大人になっていくために、たくさん知識をたくさんの人（？）たちから学び、勉強の意味や目的を考えながら生活することが、これからの大きな大きな勉強になりそうです。

勉強って何だっけ

中1女子

勉強って何だろう。わたしは勉強がきらいだから、今いきなりそんなことを聞かれても、よく分かりません。何故って、それは、あまりにも広いはん囲だから、どこからどこまでが勉強なのかわからないのです。

辞典を引いて見ると、「知識を得るために先生に教えを受けたり、本を読んだりすること」と、書いてありました。又、別の辞典でも「学業、仕事などにつとめはげむこと」と、ありました。どちらにしても同じような意味でしたが、わたしは、知識を得るためだけ

が勉強なら、その他のことは、何になるのだろうかとか、疑問を感じました。

もうひとつ人間は、何のために勉強をするのだろうかとかと考えました。それは、世の中で生きていくためでした。勉強ができなくて生きていけなくなつた人は、人間として、つまはじきされてしまいます。それは子供の頃の勉強が不十分だったからではないでしょうか。そして良い知識を得て、いい会社等に入った人は、その会社の中でも、仕事として勉強をしなければならぬのです。だから人間は、死ぬまで勉強とは、別れられないのです。生きていることが勉強なのではないでしょうか。

中には、自分の好きな絵をかいたり、スポーツをしたりする人も居ます。でも、それも一応は、勉強になつて居るのです。スポーツではどうしたら上手な、テクニクが身に付くのか考えたりしますし、絵をかくことでは、どうしたら、言葉では言い切れない表現ができるのか、どうしたら、自然のすばらしい色が出るのか等、色々と考えるのですから。歌手だつて、どうしたら、うまくその歌の表現ができるのか等々、

数え切れない程の勉強をしているように思えるのです。

今は学校で習う、数学や英語等の基本的なことしか、勉強として考えない人が多く居ます。だから、社会生活の中でも、常識を無視して、自分勝手なことばかりする人が出てくるのではないのでしょうか。人のことを考えずいじめをしたり、人を傷つけたりする子供がたくさん出てくるのは、大人が子供に対しての教え方が足りないのではないのでしょうか。

今の大人が常識が足りないから、子供が人を傷つける様なことをしていても、注意することができないのではないのでしょうか。

小学校では、道徳という時間があつて、いろいろと常識的なことを学びました。それもひとつの勉強に入つていたのです。けれど家の中での手伝いをすることは勉強ではないのでしょうか。世の中へ出るために知識を得ることが勉強というのなら、家での手伝いだつて、世の中へ出るための大切なことではないのでしょうか。だつて大人になつて一人でくらす時、家の中で洗たくも食事を作ることもしようじをすることもできなかったら一体、どうやってくらしていくのでしょうか。

わたしの母は、わたしが大人になって世の中に出た時のことを考えて「常識が身につけている方がいいのよ」と、言います。わたしも最近では、それが最もだと思ふようになりました。

だから「常識」も勉強なのです。一番大切な勉強は、常識を学ぶことで学習することも、その中のひとつではないのでしょうか。

勉強ってなんだっけ

小5女子

この作文を書き始めたのは、いいえ、考え始めたのはいつごろか、わすれるぐらい前です。

「よし、こんなことを書こう!」と、いい考えがうかんで、いすにすわつてえんぴつを持ったままではいいのですが、そのいすにすわると、コロッとわすれてしまいます。それから、一時間くらい白い紙とニラメッコです。ひごろ、私達が、もつともよく使う「勉強」という単語で、こんなに大変な思いをするなんて、夢にもおもっていませんでした。

そこで私は辞書を開きはじめました。開いている間、私は不安でした。なぜなら私がまよつたのは、学校の授業の国語や算数、理科、社会だけが、勉強じゃないような気がしたからです。

辞書には、こうかいてありました。「べんきょう……(学問、仕事などに) つとめはげむこと。」

「じゃ、学問っていうのは、何のことをいうんだらう?」

今度、私は、学問という言葉調べてみました。辞書には、「①学び習うこと②習いおぼえた知識」と、書いてありました。最初、これを見たら、「やっぱり、学校の国語、算数、理科、社会だけが勉強なのか」と思いました。

でも、②をよくみれば、ただ国語などだけじゃないということがわかりました。だって、今日の今まで、生きてきたうちの中で、いろんなことを、いろいろな人に来事に、生き物に、習わせてもらったんですもの。

例えば、「あり」。あんな小さな生き物に、私は、命の大切さを習いました。いつ人間にふまれるかわから

ないのに、えさをいっしょうけんめいはこんでいました。すを、いっしょうけんめいつくっていました。他のありと、戦っていました。小さな体に、大きな心があることを知りました。

それから、友達。けんかしたこと。あそびも、いろいろおしえてくれました。

こんな、いろいろなことを、私は学びおぼえました。これからは、学びおぼえたことを生かして、それにはげみたいと思いました。

これでやつと、勉強っていう意味が、わかったような気がします。勉強っていうものは、すぐ、手のとどくところにあるっていうことを。でも、それを深くするために、努力が必要っていうことも知りました。

勉強より大事な勉強

中2女子

「勉強より大事なことがあるんだ」

小学校四年生の時だったでしょうか。「泳ぎ」と聞いただけで涙ぐむほど、プールがきらい、泳ぐことが

怖い私を、父は、

「根性がない子は何もできない。勉強より大事なことがあるんだ！」

と叱咤激励し、私は日曜ごとにプール通いを強いられたという記憶があります。

「勉強よりも大事なこと」、父はそれ以後も時々この言葉を使いました。

「姿勢を良くしなさい」

「虫歯を作っちゃいけない」

そのあとには必ず、この「勉強よりも大事なこと」が加わりました。あいさつはきちんと、返事は「ハイ!」。父からは、こうした生活面で厳しくしつけられた気がします。

そしてその父が、ある時、海外出張のおみやげにと、クリスタルのカメラの置物を買って来てくれました。幾面もあるカットは、まるで宝石のようにキラキラと輝き、陽にあてると虹色の光が見えます。今も棚の真ん中に飾ってある、私の宝物です。

小学生の私には高価すぎる程の値段を聞いて、驚いている私に、

「美しい物を美しいと思える心を持つて欲しいからこれを買つて来たんだよ。『きれいだね』という気持ちを忘れないで欲しいね。」そう言った父、今でもはっきり覚えています。

青年の主張を聞いていました。「落ち葉もおばあちゃんも私の先生」というテーマの発表はとても印象に残りました。勉強は、教科書で勉強することだけが勉強ではなく、一歩外に飛び出してもたくさん学ぶことがあると訴えていました。落ち葉のまさに落ちる瞬間のピチピチという音を聞き、感激し、そのことで十七歳の命の尊さを知つたという発表者。彼女は、本当に素晴らしい心の持ち主だと思います。「ピチピチ」とささやくような音。彼女にとっては、涙の出る程感動する音も、見逃してしまえば何でもないことです。彼女の心には大きな目と耳がありました。彼女こそ、身も心も健康な人と言えるでしょう。感激して、私の目にも涙があふれました。

また、「十六歳の体は十六歳でなければ鍛えられないし、十七歳の感性は十七歳でなければみがくことはできないと思います。」という言葉も強く印象に残つ

ています。

受験戦争が厳しくなり、大手塾にあふれる子供達が通う今の世の中、中学受験の子が正月の三が日を返上し、特訓されている様をテレビで見ました。大みそかぐらい、家族と今年を振り返り、年越しそばを食べ、新しい年を迎える緊張感を持ちながら除夜の鐘を耳にする……こんな家族でありたいと思います。それにこんなゆとりは、当たり前のような気もするのです。

私も中学生ですから、勉強もします。私の勉強は無理のない計画に沿って実行されます。「毎日少しずつ」の精神で頑張っているつもりです。一日のうちにやることはたくさん。ピアノ、毎日続けて書いている日記。音楽だって聞きたいし、本も読みたい……。成績が下がればやはり気になりますが、でも今、私は、父が言う「美しいものを美しいと感じることのできる勉強」や、要するに「教科書の勉強より大事なこと」が少しずつ分かってきました。

視野を広げればすべてが勉強です。問題集を何冊こなしでも得られない勉強を、私の一生の課題にしていきたいと思います。

勉強きらい

黒田淑子（府中市立第二小学校教諭）

「勉強すきな人、手をあげて！」

受け持ちの五年生のクラスで聞いてみる。女の子が二、三人手をあげる。いつもひょうきんなことをする子は、「シーン。」などとふざけている。

「では、勉強きらいな人。」

「ハイ！」

もう一年近く担任していて、私の気心がわかつている子どもたちは、遠慮なく元気に手をあげる。

「アーア、そんなにきらいなの。毎日日曜だったらいいのについて思っているんでしょう。」

と、いうと、

「先生、それはだめだよ。もつとパッパラパーになっちゃうし、第一友だちと会えないのはつまらないもの。」

（うんうん、わかるわかる。）

勉強って、何だろうか。

つい先日、三十年以上も前に担任した子たちの、クラス会があり話題になったことの一つ。

「五年生の頃、先生に読んで頂いたフランダーズの犬や、アルプスの少女などを、今、自分の子に読みきかせしているんですよ。」

「そうそう、あの時の、木の葉の間からみれる太陽の光や、草の暖かさを、まだおぼえているなあ。」

当時、まわりに自然がいっぱい残っていた多摩の小学校に在職していた私は、毎日、本の読みきかせをしていた。それも教室でなく、クラス全員ひきつれて裏山に登り、木立の中に車座に座りこんで、読んでやったものだ。時には、私自身が涙声でつまったり、みんなの泣き声はやむのを待ったり、草の上を笑い転げたりした。教科の進度はというと、当然おくれるので、放課後四時過ぎまでやったり、夏休み中も集めて教えた。

「夏休み中、補習やったのおぼえてる？」

「えつ、そんなのあつたつけ。全然おぼえてないわねえ。」

「うす暗くなった教室で、火鉢にあたりながらおしゃべりしたのは、おぼえているけど。」

胸の中にズーンと残っているもの。それが勉強ではないだろうか。

ある年の学芸会で、六年生で「こぶとり」を上演した時、二百人近い子どもたちに、それぞれ役割分担をした。舞台上で演ずる子、約百人。コール隊二十人は、きつかけと、劇全体のリズムをコントロールする演出者だが、舞台下の暗い所で、暗い服装で待機しなければならぬ（各クラスのリーダー各がなる）。衣装係三十人。メーキャップ担当二十人。大道具十人。照明さん十人。そうして、もう一つ重要な役が、雨の音であった。こぶじいさんが一休みしている時、手にあたる一粒の雨。その雨音。ひそかでそして、客席全部に「ポツン」という音が聞こえなくてはならない。五人のスタッフは、雨のポツンとザアザア降る音や、にわたりの声や、さまざまの音に取り組んだ。その中の一人の男の子。いろいろなものをバケツに落としてみた。小さな石ころ、豆つぶ。自分の耳で「これだ！」と思っても、マイクを通してみると、全然違う音に聞こえたりする。練習期間の約一か月間、彼は、その音一つにうちこんだ。豆も、乾燥したものや、少ししめさせたもの等工夫をした。そして、とうとう実にいい雨音をつくり出してくれた。暗い舞台の袖で、

たった一粒の豆を落とすだけの仕事をしてきた彼の顔は、輝いていた。

「うまくいったわね。成功よ。」

思わず握手をした。この劇全部を演じ終えた時、みんなの感動は頂点に達し、手を取りあつて喜んだ。一人一人が主役である。はつきりとした目的に向かって、工夫を重ね、せいじつばいやった喜びであろう。成就感が、身につく勉強の一つといえるのではないだろうか。それには、必ず感動が伴うからである。

勉強って何だろうか。私は、これからの人生における生き方を学ぶことだと思っている。そのためには、基礎的な知識や技能は絶対必要であるし、学ぶという姿勢も身につけてほしい。その基本は、相手をじつと見て話を聞くことだ。それは相手の人格を認めることになるし、自分の主張も聞いてもらえるようになる。歴史の学習では、たくさんの人間の歩みの上に現在の自分があることを知らせたい。何か一つ夢中になれるものを見つけて没頭するもよし。

こういう勉強は、子どもたち大すぎである。

する勉強、させられる勉強

遠藤 嘉(東京都母親)

私には三人の男の子がいる。何故だか、それぞれの個性はまるで違う。頭で納得していても、それでも時々「ああ、三人たして3で割りたいナ。」と思う。そして「同じ親なのにどうしてこうも違うものか」と内心いら立ちを感じたりもする。これは複数の子供をもつ親ならば誰でも感じることはないだろうか。親になつた時から子供が成人するまでずっと子育てが続き(或いは、もつと先になつても子育てと感ずる時があるかもしれない)、子育てという勉強が親に課せられるのである。子供にとつて親のいう子育てはもしかしたらありがた迷惑かもしれない。なぜならその殆どが親から子への押しつけで子育ては構成されているからだと思う。親になつてつねに「這えば立て、立てば歩めの親心」を、心根として、「わが身につもる老を忘れて」子供に与えること、つまり押しつけになつてしまうことが、子育てと感じているからだ。がしかし

長男から次男、三男へと子育て年数が増してくるに従つて、何と子供から教えられることが多いだろう。次男の幼児期に、次男から教えられたことを、長男の時には子育ての名の下に押しつけていたことを、発見するのである。たとえば子供がころんだりした時は、長男には「あつ！」と、思わず声をあげ、そばに寄つて助け起こし、「痛かつたでしょう。気をつけなくっちゃだめよ！」という。と、長男は大声をあげて泣く。「そんなに泣かないの！」と半分いら立ちながら長男にいう。同じことでも次男の時は、そばに寄つて助けることがなかった。自分で起き上がるのをじつと見ている。泣きながら私の方へ来ると、「あつ、よしよし、いい子いい子」といって少し抱いてやる。三男になると、「あつ」という声も出ない。ただ見ている。そして、「えらい！泣かないでガマンのできるいい子だねー。すごい！」この言葉だけで本人は泣き笑い。「僕強いでしょ」でおしまい。数年の間にこんなにも、親は子供にかける言葉が変化してくるのである。師匠は子供なのだ。

人生つねに勉強と人はよくいう。自分自身が注意深

く物事をとらえ、そのポイントを見つけていることが、自分で「する勉強」だと思う。そしてその裏には必ず「させられる勉強」がひそんでいるように思う。

子供が学齢期になる。すると十分遊んで健康であれば、勉強は二のつぎと思ひ、又自分にいきかせる。それが二年生、三年生と学齢があがるにつれ、「宿題ないの」「ほかの子は何点だった？」等々、子供にとつてつらい言葉が多くなり、ついには「させられる勉強」が多くなっていく。しぜんと自分からする勉強は遠くはなれていってしまう。親はそれでも自分から進んで勉強してほしい、と願っているし、どうしたら進んで「する勉強」になるのだろうか、と悩んでしまふのだ。

今日の社会の在り方が悩める親（私）をつくり出しているのかも知れない。だがもう一度、子供を産んだ時の喜びに戻ってみる。自分よりはるかに大きく成長した中学生でも、幼さが残りどことなくかわいらしく思え、赤ちゃんの顔とダブって見えてくるのである。すると、この子供をどうやって育ててきたのだろうかかと、考えなおすことがある。何にでも共通しているこ

ともかもしれないが、基本に忠実にすること。子育ても基本どおりにする。子育ての基本は、それぞれの親が考え出すことが、一番いいと思うし必要があるだろう。なぜなら、我が子に責任をもたなくてはならないからだ。「子供は親の後ろ姿をみて育つ」いや「親の前をみて育つ」という人もいる。きつとどちらも、あてはまるのではないかと思う。親の心根によつて子供は自分の自由をもち、考え出し、いいことも悪いことも子供自身が体験し、経験することによつて、つまり「する勉強」によつて成長していくように思う。私は子供の介添えができ、方向性を見極める役には立ちたいと思っている。足が大きくなる、背が高くなる等の、現象面はすぐに見極めることができるが、子供が成長し、自立していくに従つて出てくる「ゆれ動く心」を、私はキヤッチしていたいと思つている。今の私は、子供から「させられる勉強」を有難く受け取ろうと思つている。ゆとりをもつて。

再掲載を受けて――

勉強って

伊藤 僚（現・山村留学指導員）

学校に通う年齢の子どもたちにとって、人生の時間の大きな部分を占める勉強。今号の特集記事では、「勉強ってなに？」と、勉強の本質について考えることをきっかけに、当時の小学生、中学生たちが「勉強は（好きかどうかはさておき）人生にとつて必要なことである」（「知識を身に付ける）勉強より大事な勉強がある」と自分の体験をもつて語っている点が印象的だ。

「勉強」ってなんだろう。再掲載の文章を読んで考えてみると、自分の人生をどう生きるか選択し、実行する力を、色々な「先生」からの教えによって自分のものにしていくことだと感じた。山村留学という環境は実に多様な「先生」に満ちている。

二つの例を紹介しよう。一つ目は、今年の大岡ひじり

学園の個人体験活動（自分が興味を持ったこと、大岡でしかできないことをとことん追求し、収穫祭で披露する）で「大岡で手に入る食材でラーメンを作る！」をテーマに、ラーメン作りをしたAの話だ。

Aは、大のラーメン好き。自分で材料の小麦を収穫して、石うすで挽いてみたが、難しかったので製粉所にお願ひすることにした。また、大岡地区内のご家庭をいくつも訪ねてトンコツの代わりにイノシシのげんこつを調達した。さらには、ラーメン屋としてののれんを手作りしたり、陶芸活動のときにラーメンどんぶりをつくったり、竹で割りばしを30膳ほど製作したりもして、最終的には手打ちの麺とイノシシのジビエトンコツスープでトッピングも自分で作ったラーメンを皆さんに食べてもらった。なにより、一つひとつの工程を熱中して行うAの姿が、印象的であった。

このように、興味関心が入り口となり、そこから先は、できることが増えていく面白さが原動力となつて、自分からさまざまな体験を積み重ねていくことができるのだろう。Aのようにワクワクしながら体験を広げていくことは、人生にとつて大切な「勉強」であると同時に、

ひとつの理想的な「勉強」の形だといえる。

もう一つは日常の場面から、宿題で漢字の書き取りをしているNの話だ。一般的には、ここで漢字を覚えたというのが勉強だろう。では、ここで30分間椅子に座って集中して書き取りを続けられたとしたら、それもひとつの力を身に付ける勉強なのではないか？ 実際は、周りの義兄弟姉妹たちに話しかけられたり、ちよっかいを出されたりするのを、あしらいながら机に向かうこともある。これは、勉強の主目的にとって障害でしかないが、見方を変えれば「勉強以外の勉強」にもなる。出されたちよっかいをうまくあしらえたのならそれでよい。逆に、集中できなかったから、それを踏まえて次は自分で場所を変えてみたり、事前に、その子に「勉強しているときは邪魔しないでね！」と釘くぎを刺すなど、工夫をすることもできる。

「話しかけてくる兄弟」という「先生」がいなければ、このような「勉強」は生まれえないものだ。毎日それではいけないが、このような障害を受け入れたり、乗り越えたりする経験は、人生にとって大切な勉強だ。

また、この「先生」という役割は、大人が真似をしても、

兄弟姉妹たちと同じような役割を担うことができない、子ども同士の関係だからこそできる「勉強」なのだ。

これら二つの例をとっても、勉強以外の勉強は、あらゆる人の周りに無数に存在しているといえるだろう。子どもたちを取り巻く環境の中に、良い「先生」となりうる、勉強の種をたくさん散りばめていくことが大人の役割ではないだろうか。子どもたちは、その中から、自分の感性に沿ってAのように、やりたいことを追求したり、Nのように周りとの関係を調整したりする。そうやって、うまくバランスを取りながら、生きていくのだ。

感性にそって、自分の「先生」を見つけて学ぶこと。それが人生にとって大事な勉強に繋がるのだと思う。